論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	甲 乙 第　　号	論文提出者名	相原　喜子
論文審査委員氏名	主査　夏目　長門　特殊診療科教授 副査　福田　　理　教授 前田　初彦　教授		
論文題名	口蓋裂言語に対する一般人の認知に関する研究　―終助詞表現の発話者印象への影響―		

インターネットの利用による公表用

（論文審査の要旨）

No. 1

愛知学院大学

言語障害は、口蓋裂に伴う問題の中で、最も重要なものの一つであり、患者の心理社会的側面に影響を与えると考えられている。そのため、従来の言語訓練に加え、幼児期や学童期に口唇口蓋裂児の心理的負担を軽減させる訓練方法の構築が必要である。

本研究は口唇・口蓋裂患者のコミュニケーション能力を向上させるための口蓋裂言語の新たな言語訓練方法を構築する上での基礎資料を得ることを目的に、口蓋裂の言語障害の代表例である呼気鼻漏出による子音の歪み（Nasal Emission：以下 NE）における終助詞表現の発話者印象への影響について、調査・分析が行われていた。研究対象者は、口蓋裂言語に関する知識ならびに聴力障害を有さない 18～24 歳の学生とし、発話者印象について SD 法（7 件法）を用い、16 の印象評価項目について評価させていた。発話文は予備調査の結果、終助詞が発話者印象へ影響し得ることが明らかであった 6 つの発話場面と 11 の基本文を設定し、付加する終助詞は先行研究を参考に、“ね”と“よ”を選定していた。

その結果、以下の結論が得られていた。

①第１因子の「親和性因子」と第２因子の「活動性因子」が抽出されていた。クロンバックのα係数は、第１因子、第２因子ともに 0.8 以上であり、内的信頼性が高かった。

②発話者印象に対する発話文要因および終助詞要因の効果の有無を検討した結果、第１因子（親和性）、第２因子（活動性）ともに、発話文要因の主

効果、終助詞要因の主効果、および２要因の交互作用効果は、すべて有意であった。

③発話場面要因、および終助詞要因の発話者印象に対する総合的な効果の有無の検討を行った結果、第１因子（親和性）では、発話場面要因の主効果、終助詞要因の主効果、および２要因の交互作用は、すべて有意であった。各要因の主効果の多重比較の結果、発話場面、終助詞要因ともに有意であった。発話場面要因と終助詞要因の交互作用の多重比較の結果、とりわけ、“ね”において、発話場面が「依頼」であっても「準命令」であっても親和性は相対的に高いが、“終助詞なし”は「依頼」では親和性は高くなるのに対して「準命令」では低いことが明らかであった。終助詞のない「依頼」「認識」での親和性は共に高いが、“よ”の親和性は、「認識」では高いが「依頼」では低いことが明らかであった。終助詞のない「依頼」、「勧誘」での親和性は共に高いが、“よ”の場合の２つの発話場面の親和性は、「勧誘」に関する発話場面のそれは相対的に高いが「依頼」に関する発話場面のそれは相対的に低いことが明らかであった。第２因子（活動性因子）において、発話場面要因の主効果、終助詞要因の主効果、および２要因の交互作用は、すべて有意であった。発話場面要因の主効果の多重比較の結果、「準命令」と「認識」、「準命令」と「評価」、「認識」と「勧誘」、「評価」と「勧誘」、及び「勧誘」と「希望」間の対比のみ有意であった。終助詞要因の主効果の多重比較の結果、“終助詞なし”と“よ”の対比以

外は有意であった。発話場面要因と終助詞要因の交互作用の多重比較の結果、とりわけ、“ね”において、「準命令」で活動性は高いが、「評価」では活動性は低いことが明らかであった。 “よ”における活動性は、「準命令」でも 「評価」でもほぼ同じぐらい低いことが明らかであった。 これらの結果から、「依頼」と「準命令」の場面で“ね”を付加することにより、「親しみやすく」「活発な」印象へ改善しうることが可能であることが示唆された。さらに、「準命令」では “終助詞なし”と “よ”、「評価」の場面での“よ”の文末表現を回避することを訓練に取り入れることにより、感じの良い活動的な印象となり、好感度を上げることが期待できる。

これらの結果から、以下の知見を得ていた。

1）「終助詞」、「発話文」の発話者印象への影響、さらに「終助詞」と「発話文」が交互に影響していることが明らかになった。

2）「発話場面」と「終助詞」を適切に組み合わせることにより、発話者の「親しみやすく」「活動的な」印象をもたらし得るものと考えられた。

4）終助詞と発話場面の発話者印象に対する総合的な効果が明らかになり、口蓋裂言語に対する印象改善のための言語訓練に使用しうる要素が見いだされた。

5）本研究により、口蓋裂の言語障害の発話者印象改善のための新たな訓練方法へ、終助詞表現を導入することの意義が示されたものと考えられる。

（論文審査の要旨）

No. 4

愛知学院大学

本研究は、口蓋裂の言語障害における終助詞表現の発話者印象への影響を明らかにするため、予備研究を行なった上で使用する発話文の選定し、本研究を行っており、研究計画が十分練られていた。さらに、詳細に統計分析し、様々な視点から検討されていた。よって、小児歯科学、口腔病理学、口腔外科学、およびその関連諸学科に寄与するところが大きく、本論文は博士（歯学）の学位授与に値するものと判定した。

平成２８年　１月１４日